

3. 定点把握対象感染症患者報告状況（週報）

（1）過去5年間の報告状況

疾患名	2017年 (平成29年)	2018年 (平成30年)	2019年 (令和元年)	2020年 (令和2年)	2021年 (令和3年)
インフルエンザ	10,178	12,318	10,024	3,095	4
RSウイルス感染症	2,044	1,684	1,862	140	2,912
咽頭結膜熱	718	466	563	222	242
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2,229	1,729	772	475	254
感染性胃腸炎	6,737	6,511	6,192	3,365	4,397
水痘	352	259	262	192	128
手足口病	2,041	1,212	2,086	71	678
伝染性紅斑	92	200	666	115	6
突発性発しん	858	848	470	514	502
ヘルパンギーナ	687	817	486	170	411
流行性耳下腺炎	817	110	56	50	30
急性出血性結膜炎	1	—	3	—	—
流行性角結膜炎	43	58	117	29	21
細菌性髄膜炎	—	4	3	3	1
無菌性髄膜炎	2	3	7	4	3
マイコプラズマ肺炎	13	26	131	43	7
クラミジア肺炎	—	1	1	—	—
感染性胃腸炎（ロタウイルス）	12	2	8	1	1

(2) 各疾病の報告状況

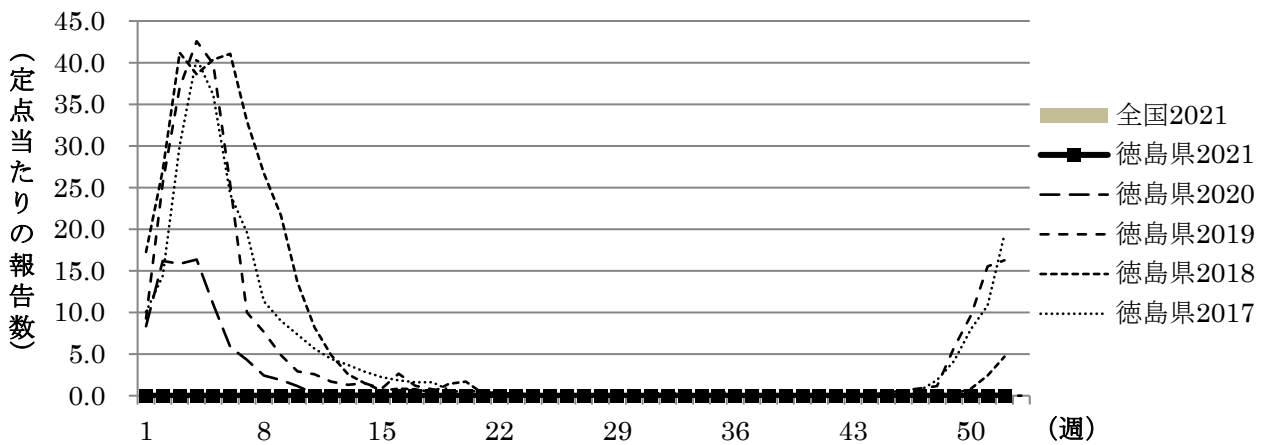
① インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

年間報告数は4件であり、2019年は10,024件、2020年は3,095件と、2年連続で大きく減少した。報告があった週は第12週、14週、51週のみであった。年齢層別報告数では、4歳以下1件、20歳代1件、80歳以上2件であった。

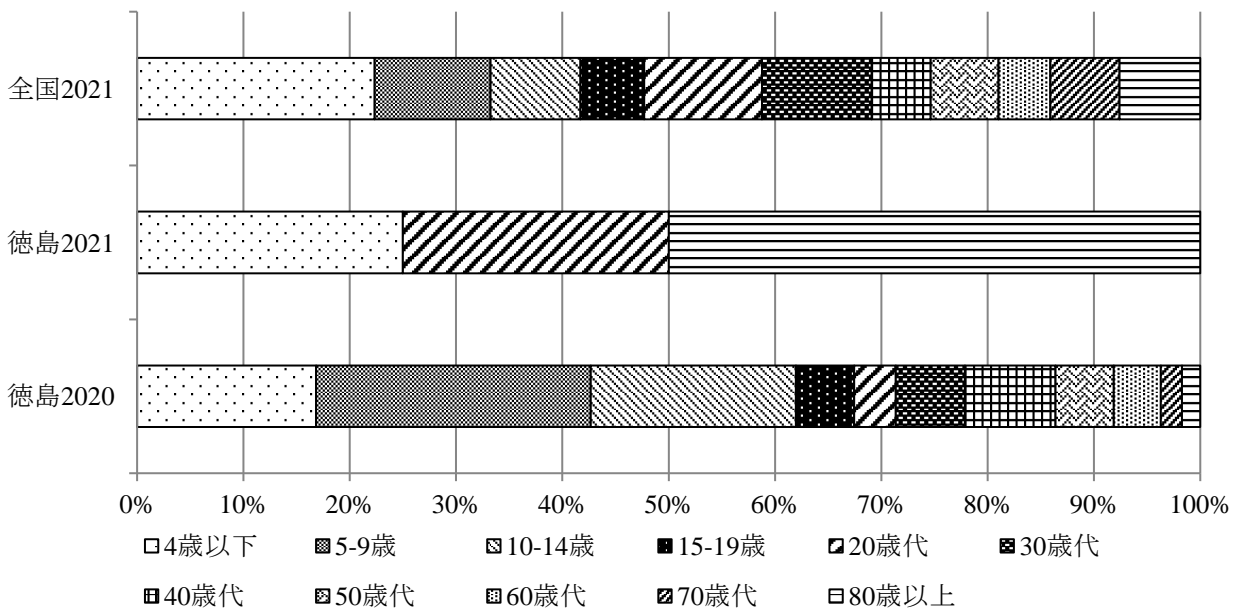
後期流行について、2019年以前の5年間では、流行開始の目安とされる1.0件/定点を超えるのは平均で第50週頃であったが、前年に引き続き今年も1.0件/定点を超えることなく、低水準（0.00～0.05件/定点）のまま越年した。

本年は全国的にも大きな流行はなく、新型コロナウイルス感染症による衛生意識の向上、行動の自粛や制限が大きく影響したと考えられた。

【インフルエンザの週別患者報告状況】



【インフルエンザの年齢層別報告数】

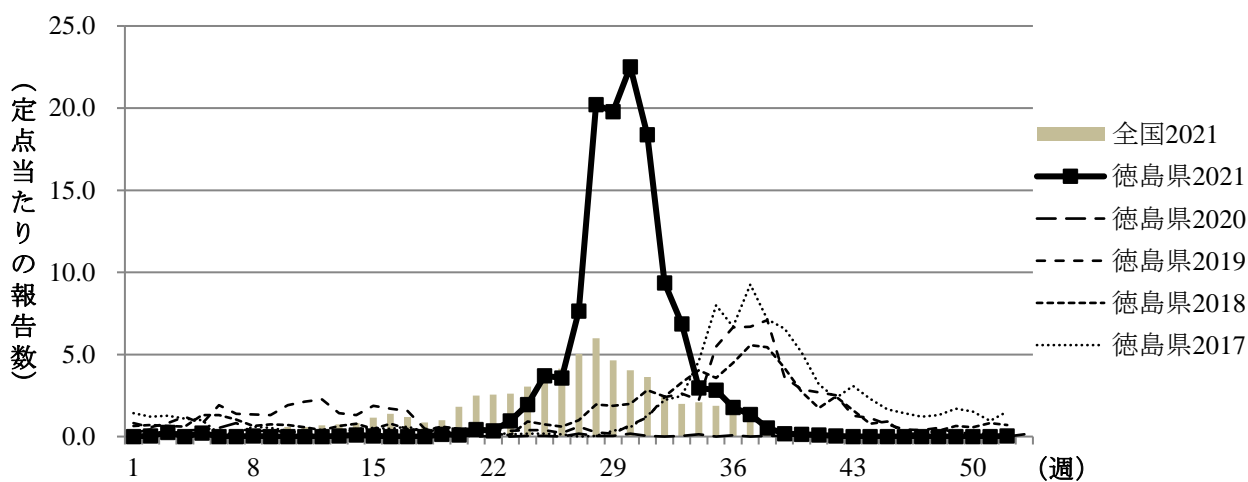


② RS ウイルス感染症

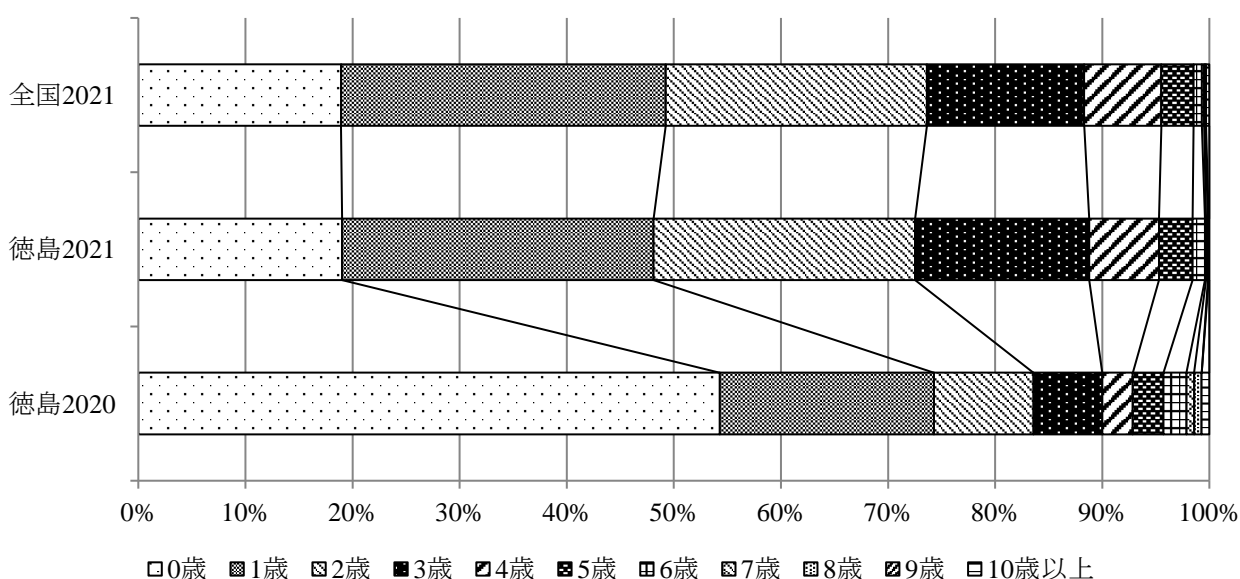
年間報告数は2,912件と、前年（140件）より大きく増加した。本疾患は2017年以降、夏から秋にかけて流行しており、本年も第27週から増加し、第30週にピーク（22.52件/定点）を迎えた。第27週～37週で全国平均を上回り、この間の報告数は年間の約90%を占めた。

本疾患の発症の中心は、前年までは2歳未満であったが、本年の年齢層別報告数は、0歳19.0%、1歳29.1%、2歳24.4%、3歳16.3%、4歳以上11.2%であった。前年と比較して0歳の占める割合が大きく減少し、2歳以上が増加しており、全国でも同様の傾向がみられた。

【RS ウイルス感染症の週別患者報告状況】



【RS ウイルス感染症の年齢層別報告数】



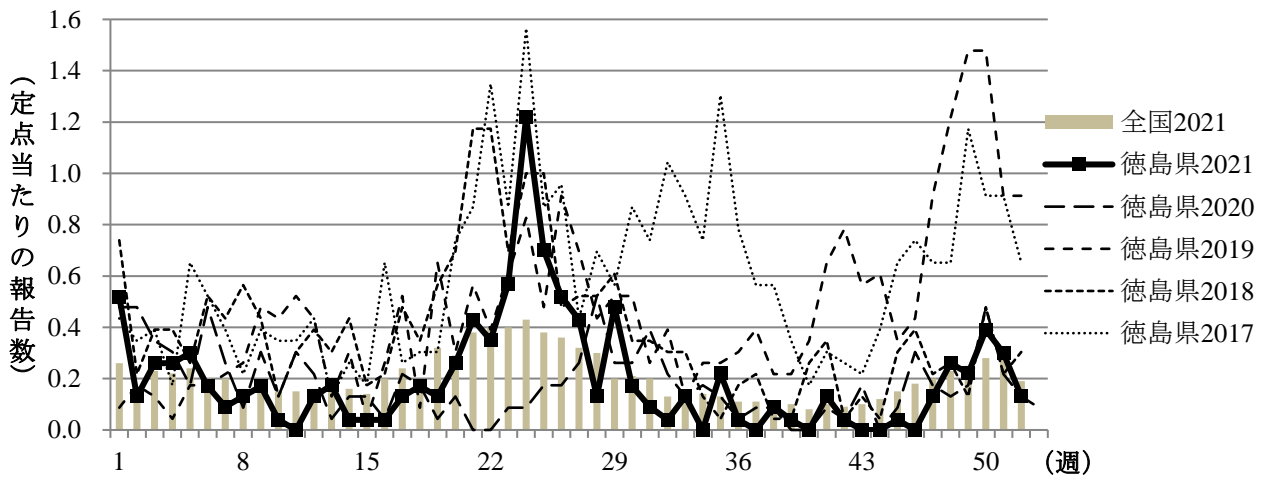
③ 咽頭結膜熱

年間報告数は242件と、前年(222件)より増加した。本疾患の流行パターンは、6月ごろから増加し始め、7～8月にピークを示した後、冬季にもピークが見られる。

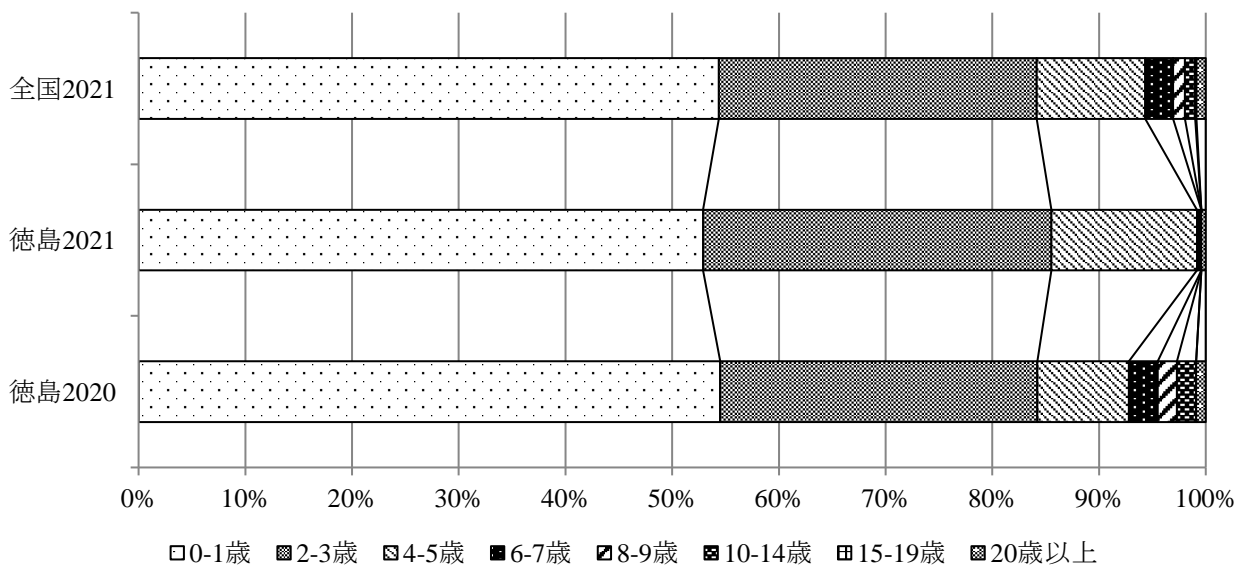
本年は5月下旬頃より増加しはじめ、6月は全国平均を上回り、第24週にピーク(1.22件/定点)を示した。1月(第1週 0.52件/定点)と12月(第50週 0.39件/定点)にも小さなピークが見られた。

年齢層別報告数は、0～1歳52.9%、2～3歳32.7%、4～5歳13.6%、6～7歳0.4%、8歳以上0.4%であり、5歳以下が約99%を占めた。

【咽頭結膜熱の週別患者報告状況】



【咽頭結膜熱の年齢層別報告数】

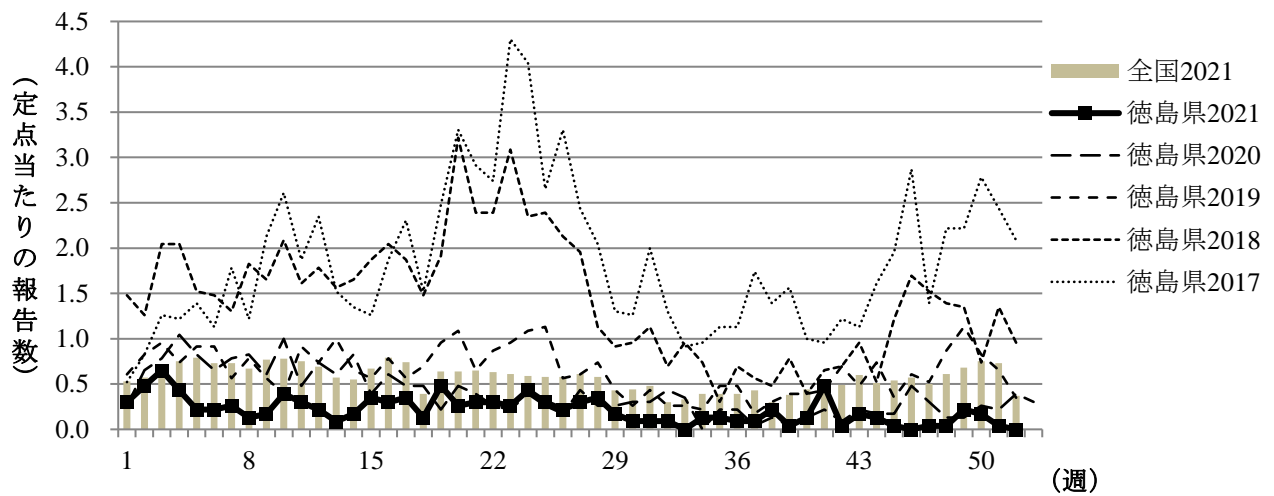


④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

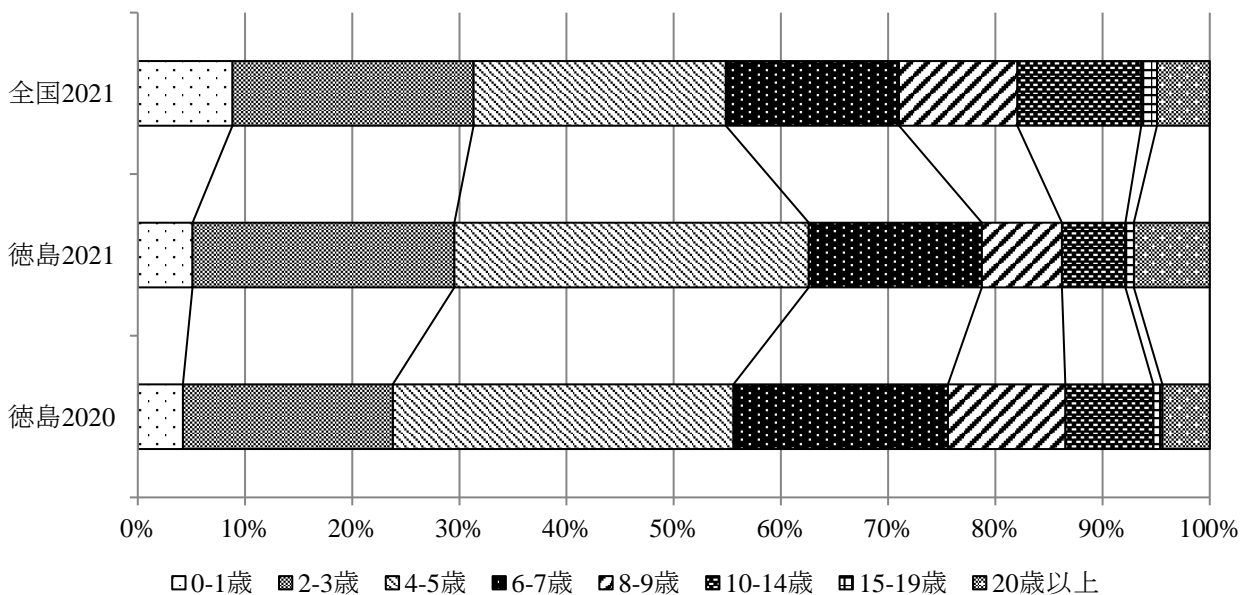
年間報告数は254件と、前年(475件)より大きく減少した。本疾患は、冬季および春から初夏にかけて増加するとされるが、本年は、年間を通じて目立ったピークもなく報告数の低い状態(0.65件/定点以下)が続いた。

年齢層別報告数は、0～1歳5.1%、2～3歳24.4%、4～5歳33.1%、6～7歳16.1%、8～9歳7.5%、10～14歳5.9%、15歳以上7.9%と、2歳～7歳の割合が高かった。

【A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の週別患者報告状況】



【A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の年齢層別報告数】

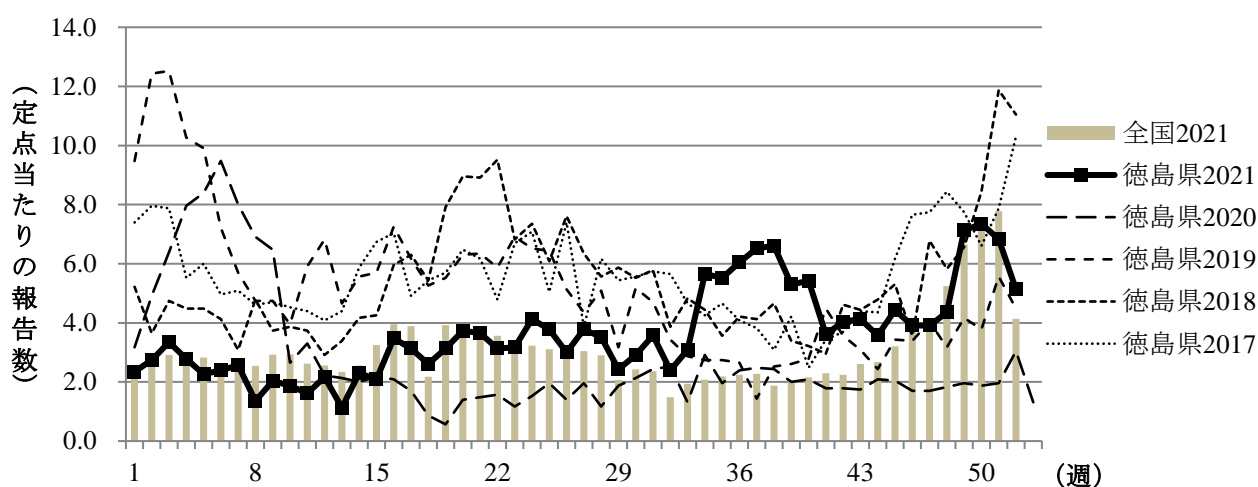


⑤ 感染性胃腸炎

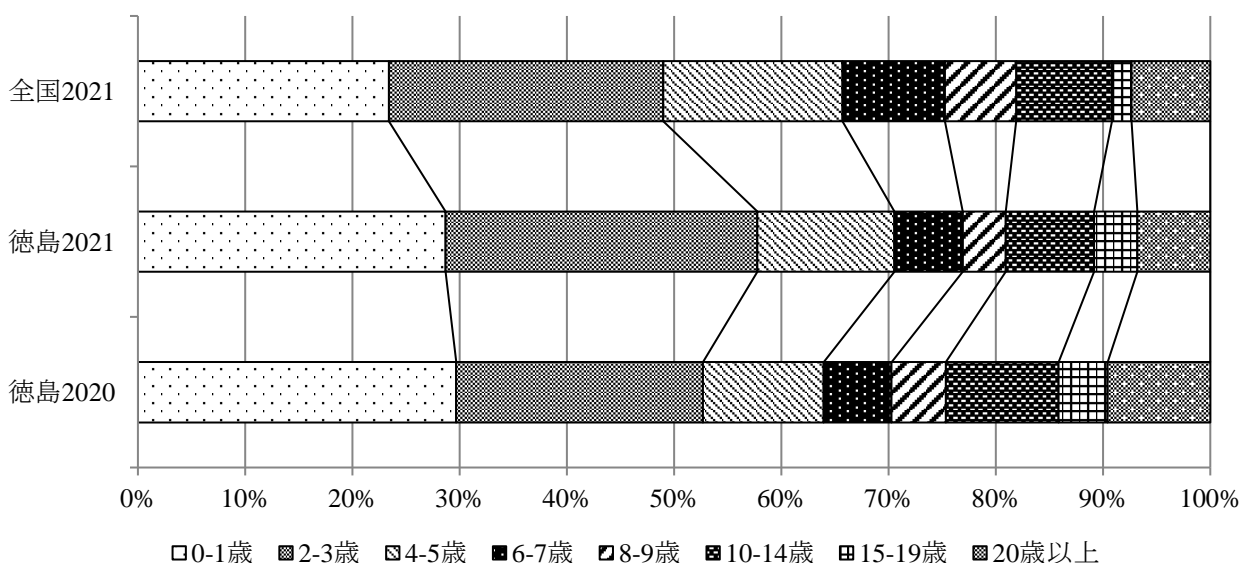
年間報告数は4,397件と、前年(3,365件)より大きく増加した。本疾患の流行パターンは、初冬から増加し12～1月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一度なだらかなピークができ、その後初夏までだらだらと続くことが多い。本年は、前期流行は見られず、8月下旬から増加し、第38週でピーク(6.61/定点)が見られ、第27週から46週では全国平均を上回った。後期流行は12月にピーク(第50週7.35件/定点)を示した。

年齢層別報告数は、0～1歳28.7%、2～3歳29.1%、4～5歳12.8%、6～7歳6.4%、8～9歳4.0%、10～14歳8.2%、15歳以上10.8%と5歳以下の乳幼児が全体の約70%を占めた。

【感染性胃腸炎の週別患者報告状況】



【感染性胃腸炎の年齢層別報告数】

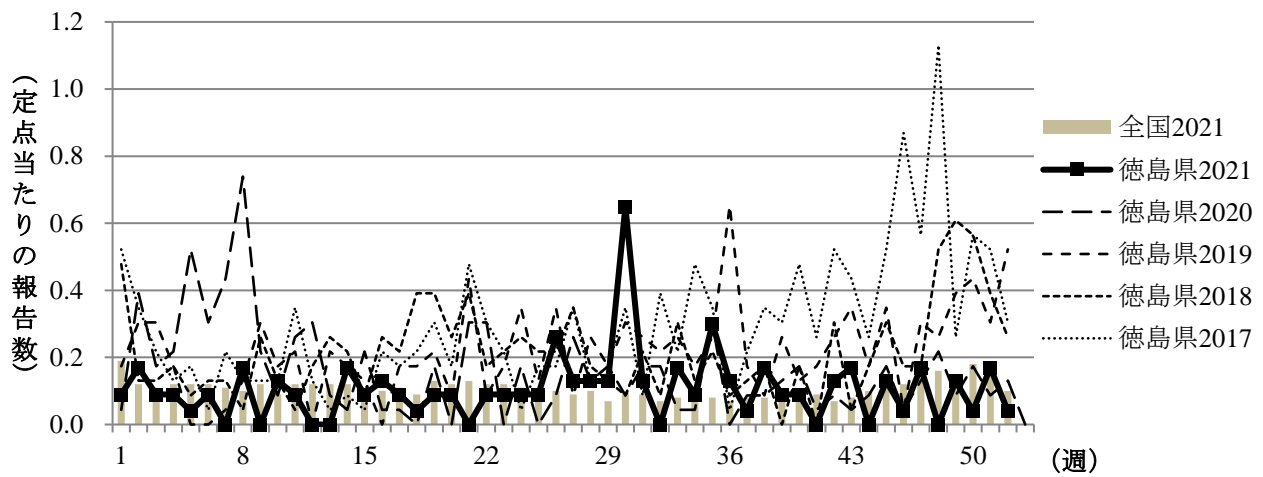


⑥ 水痘

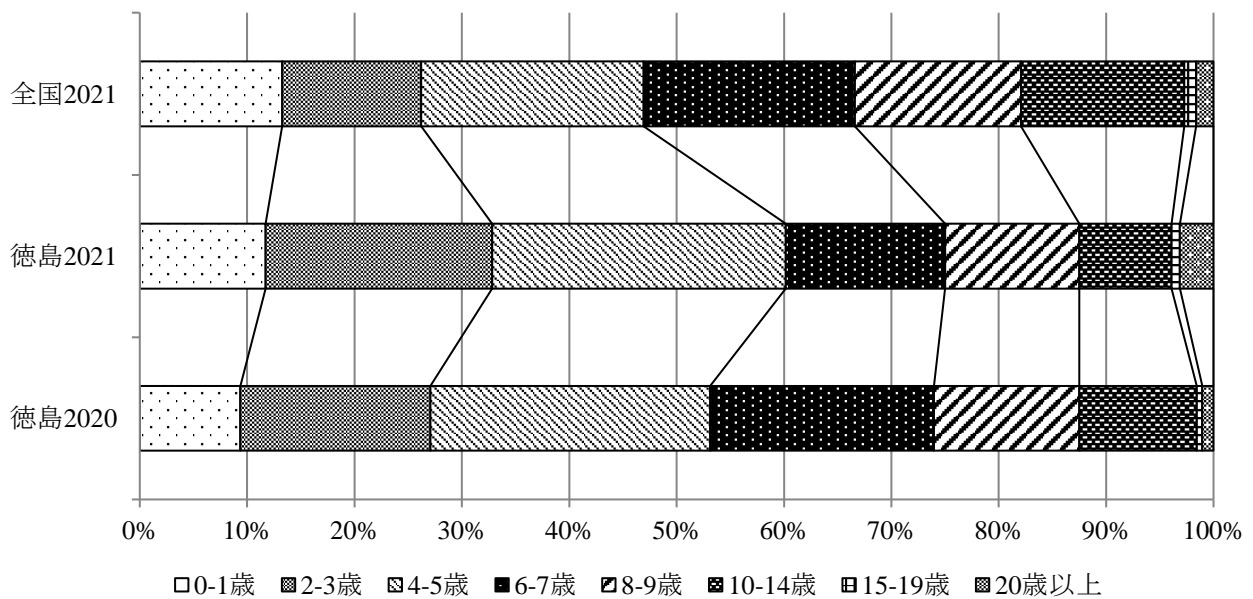
年間報告数は128件と、前年(192件)より減少した。本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行するとされる。本年は第30週(0.65件/定点)に全国平均を上回ったが、その他の週に大きなピークは見られず、年間を通じて低水準(0.00~0.30件/定点)のまま推移した。

年齢層別報告数は、0~1歳11.7%、2~3歳21.1%、4~5歳27.3%、6~7歳14.9%、8~9歳12.5%、10歳以上12.5%と10歳未満が全体の約88%を占めた。

【水痘の週別患者報告状況】



【水痘の年齢層別報告数】

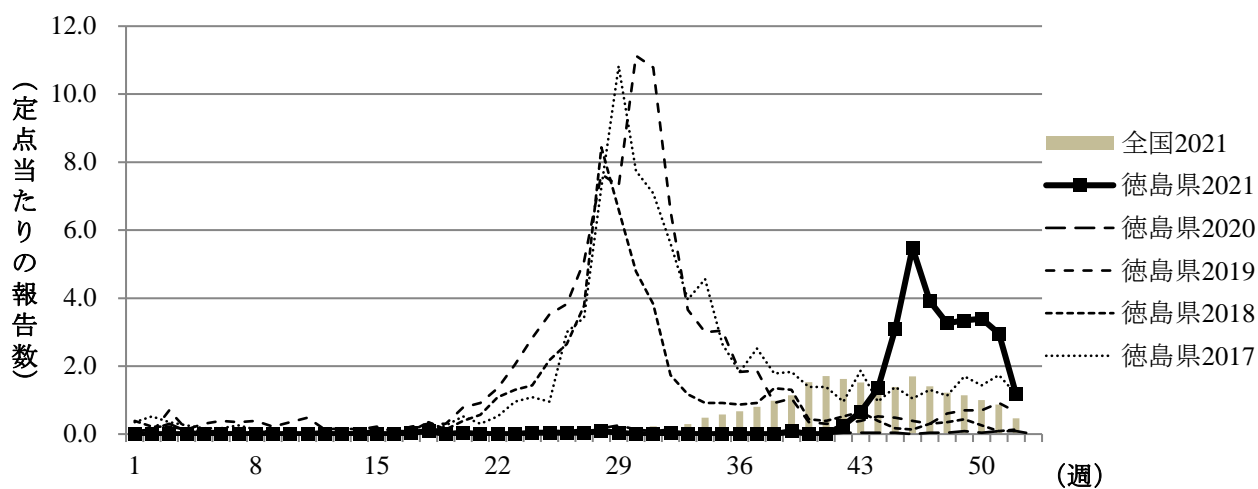


⑦ 手足口病

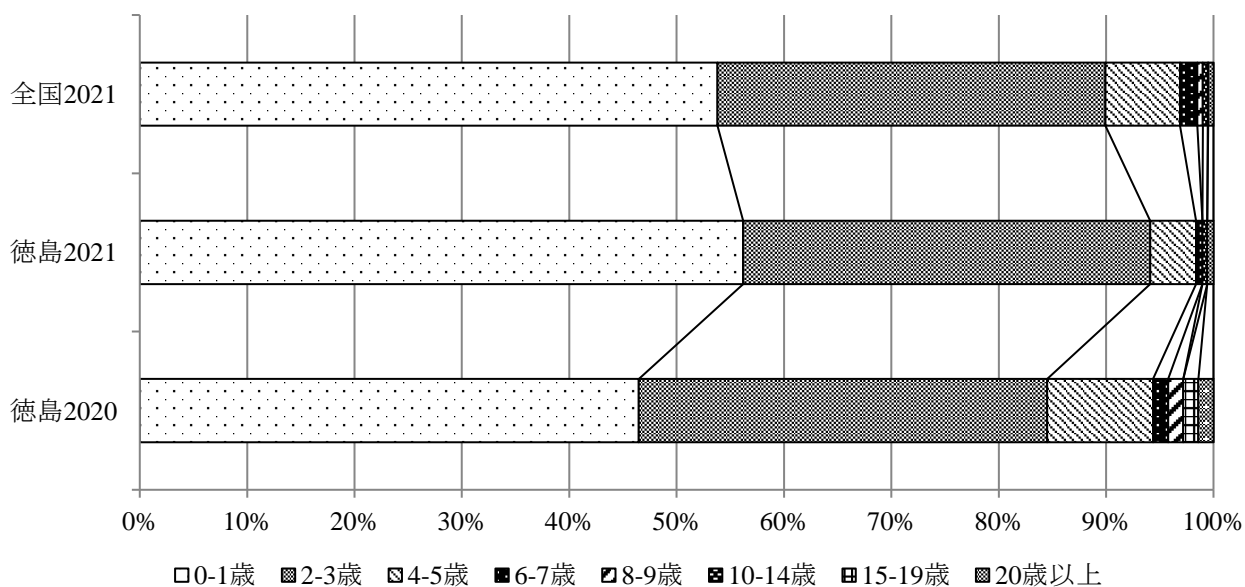
年間報告数は678件と、前年(71件)より大きく増加した。本疾患は夏期に流行する代表的な感染症であり、近年、報告数は年によって大きく異なっている。本年は例年とは異なり、年当初は少なかったものの第42週から増加し始め、11月にピーク(5.48件/定点)を示し、第45週から第52週まで全国平均を上回った。

年齢層別報告数は、0～1歳56.2%、2～3歳37.9%、4～5歳4.3%、6～7歳0.6%、8歳以上1.0%であり、5歳以下が全体の約98%を占めた。

【手足口病の週別患者報告状況】



【手足口病の年齢層別報告数】

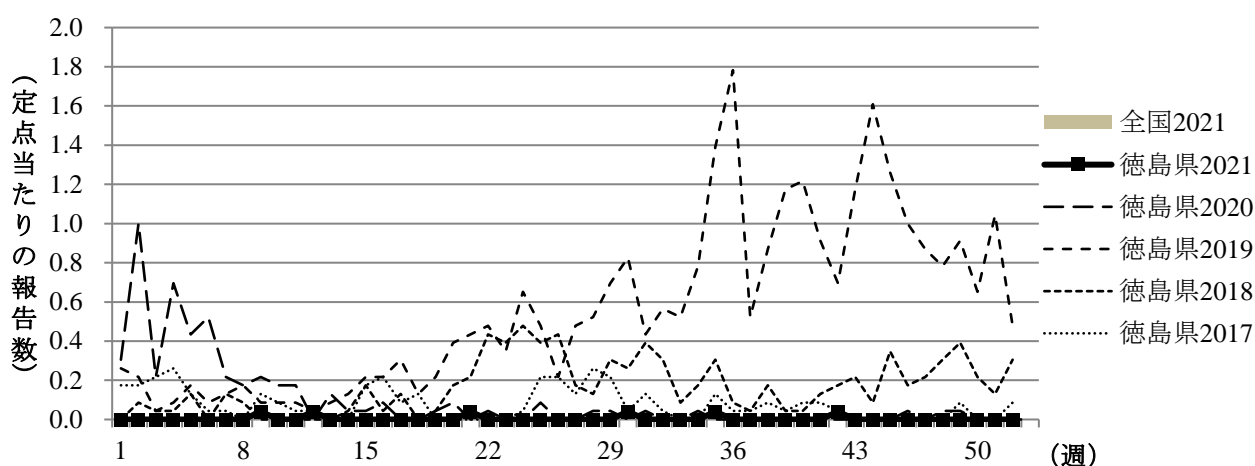


⑧ 伝染性紅斑

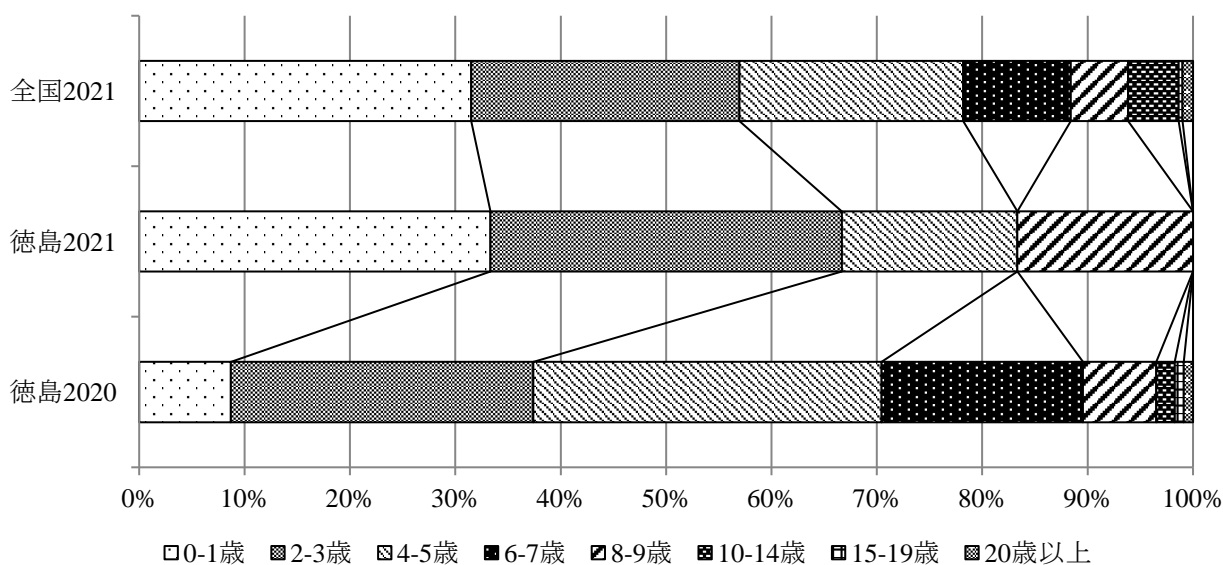
年間報告数は6件と、2019年初夏から2020年春まで流行が見られた前年（115件）より大きく減少し、過去5年間では最も少なかった。本疾患は例年、年始頃より7月上旬にかけて増加するが、流行の小さい年は季節性が見られないことが多い。本年は、年間を通じて低水準（0.00～0.04件／定点）で推移した。

年齢層別報告数は、0～1歳33.3%、2～3歳33.3%、4～5歳16.7%、8～9歳16.7%と、5歳以下の乳幼児の割合が高かった。

【伝染性紅斑の週別患者報告状況】



【伝染性紅斑の年齢層別報告数】

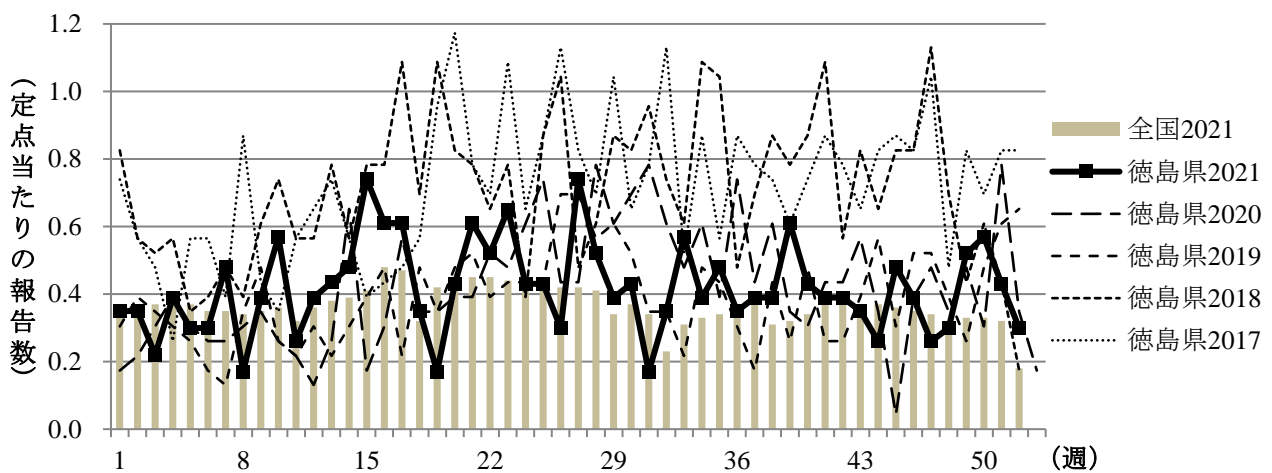


⑨ 突発性発しん

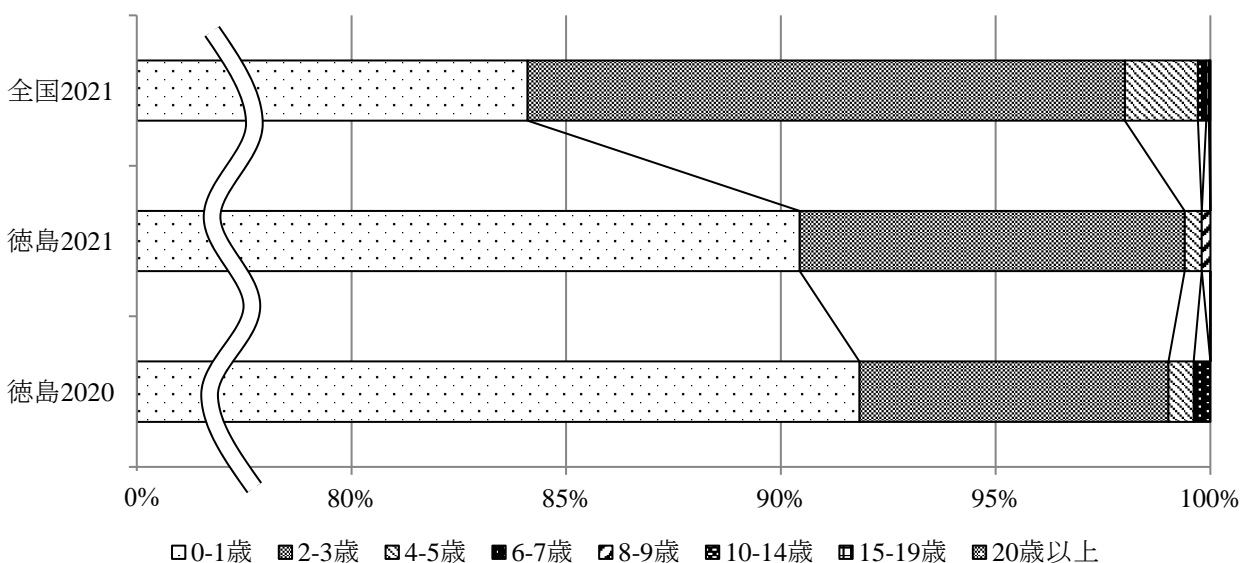
年間報告数は 502 件と、前年 (514 件) より減少した。本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内で推移するとされる。本年もピークは示さず、大きな季節的変動も見られないまま、一定の範囲内 (0.17~0.74 件/定点) で推移した。

本疾患は、6 カ月~1 歳代の小児に好発し、ほとんどの子どもが 3 歳までに感染するといわれている。年齢層別報告数は 0~1 歳 90.4%、2~3 歳 9.0%、4~5 歳 0.4%、6 歳以上 0.2%と、1 歳以下が最も多く、3 歳以下が大半を占めた。

【突発性発しんの週別患者報告状況】



【突発性発しんの年齢層別報告数】

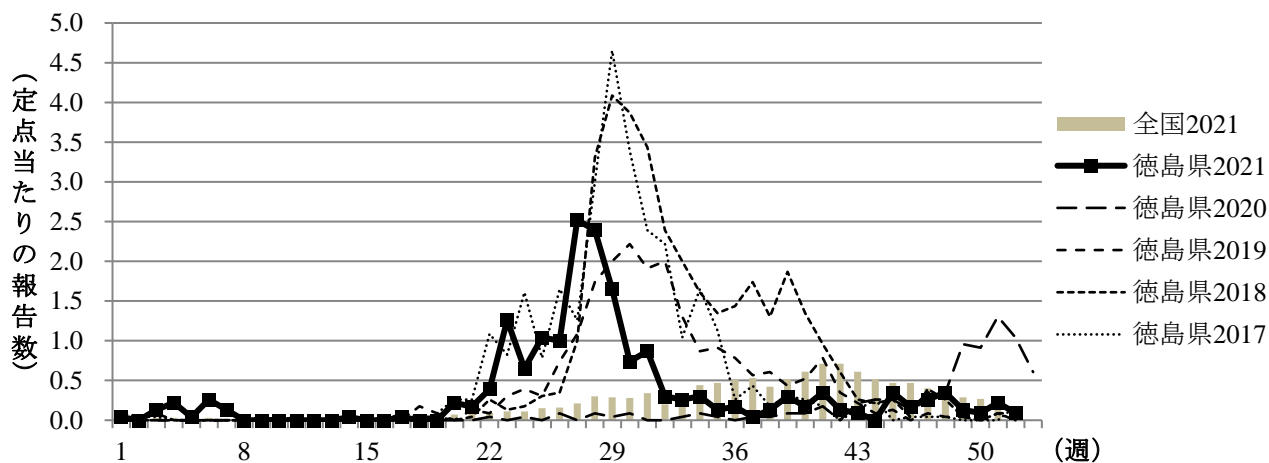


⑩ ヘルパンギーナ

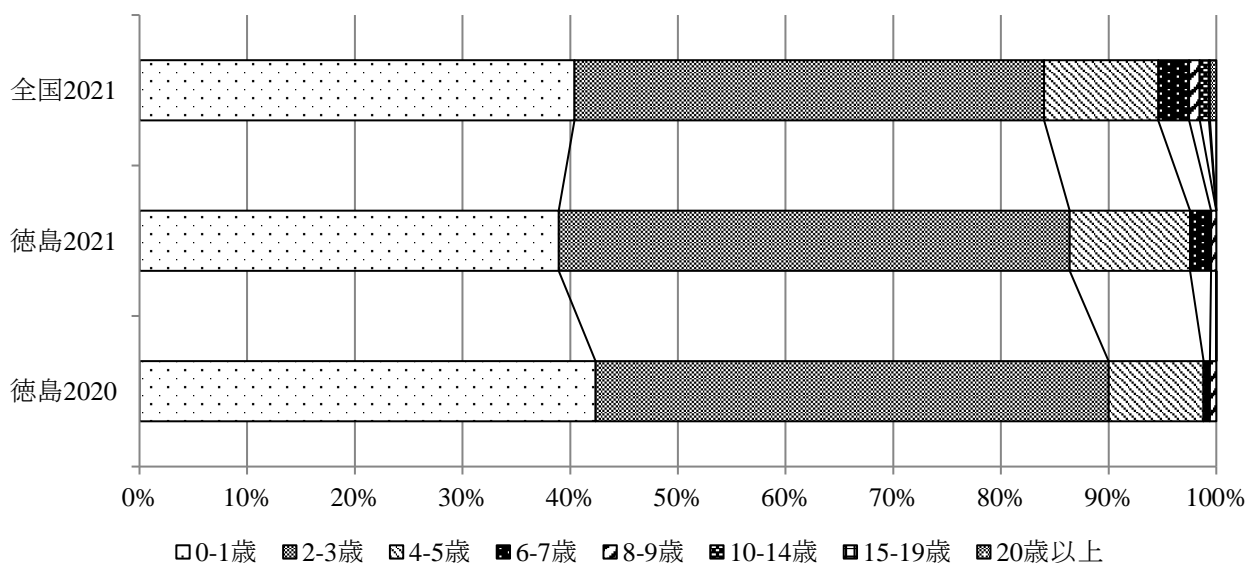
年間報告数は411件と、前年(170件)より大きく増加した。本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である。本年は、第20週から第33週まで全国平均を上回り、第27週にピーク(2.52件/定点)を示した。

年齢層別報告数では、0～1歳 38.9%、2～3歳 47.5%、4～5歳 11.2%、6～7歳 1.9%、8歳以上 0.5%であり、5歳以下の乳幼児が約98%を占めた。

【ヘルパンギーナの週別患者報告状況】



【ヘルパンギーナの年齢層別報告数】

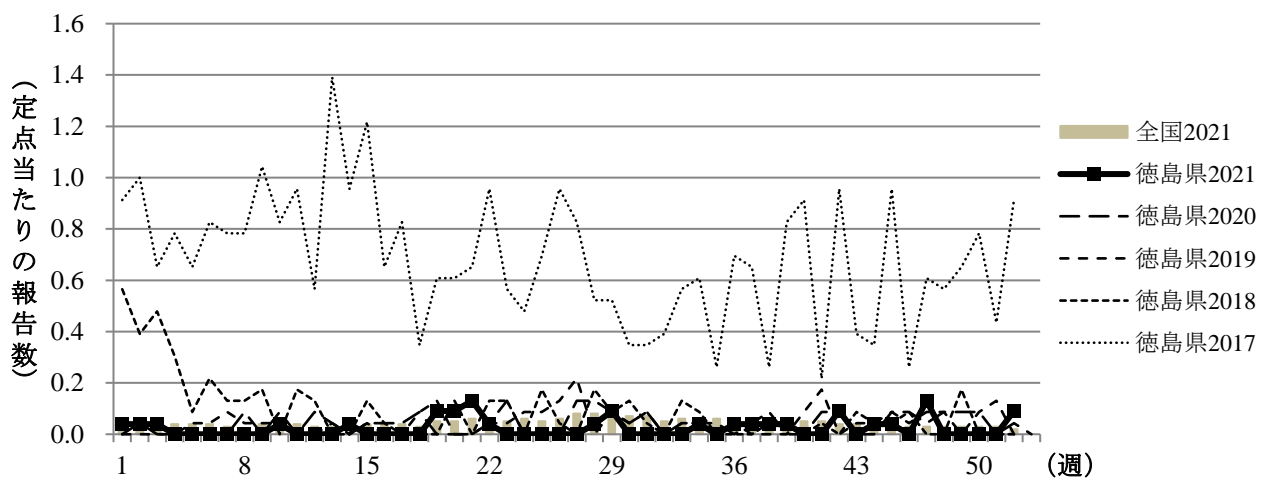


⑪ 流行性耳下腺炎

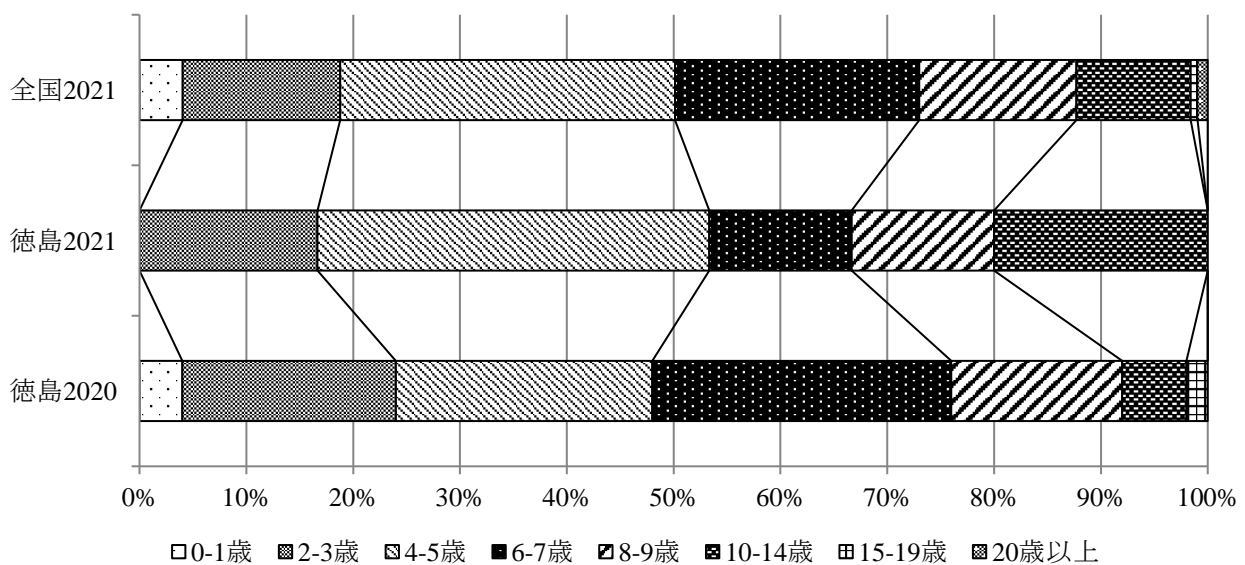
本年は流行が見られず、年間報告数は30件と、前年(50件)より減少し、年間を通じて低水準(0.00~0.13件/定点)で推移した。本疾患は年間を通して発生するが、晩冬から春にかけて報告数が増加するとされる。また、過去10年間では2010~2011年、2016~2017年と、数年おきに大きな流行が見られている。

年齢層別報告数は、2~3歳16.7%、4~5歳36.7%、6~7歳13.3%、8~9歳13.3%、10歳以上20.0%であり、4~7歳が約50%を占めた。

【流行性耳下腺炎の週別患者報告状況】



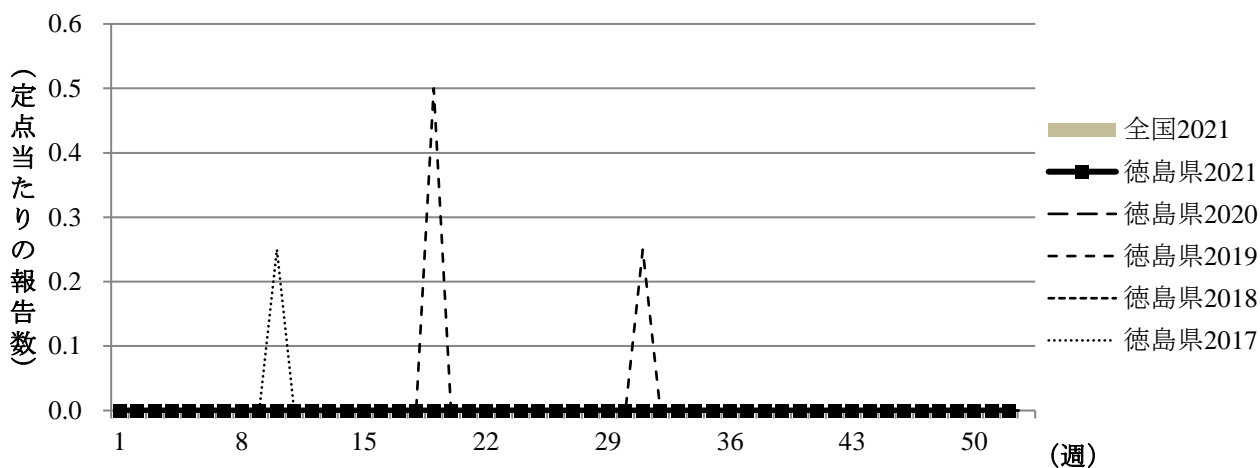
【流行性耳下腺炎の年齢層別報告数】



⑫ 急性出血性結膜炎

本年は報告がなかった。過去5年間では2019年(3件)を除き毎年0~1件で推移している。本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性も見られず、報告数は低いまま微増微減を繰り返すたとされており、県内での流行は認められていない。

【急性出血性結膜炎の週別患者報告状況】

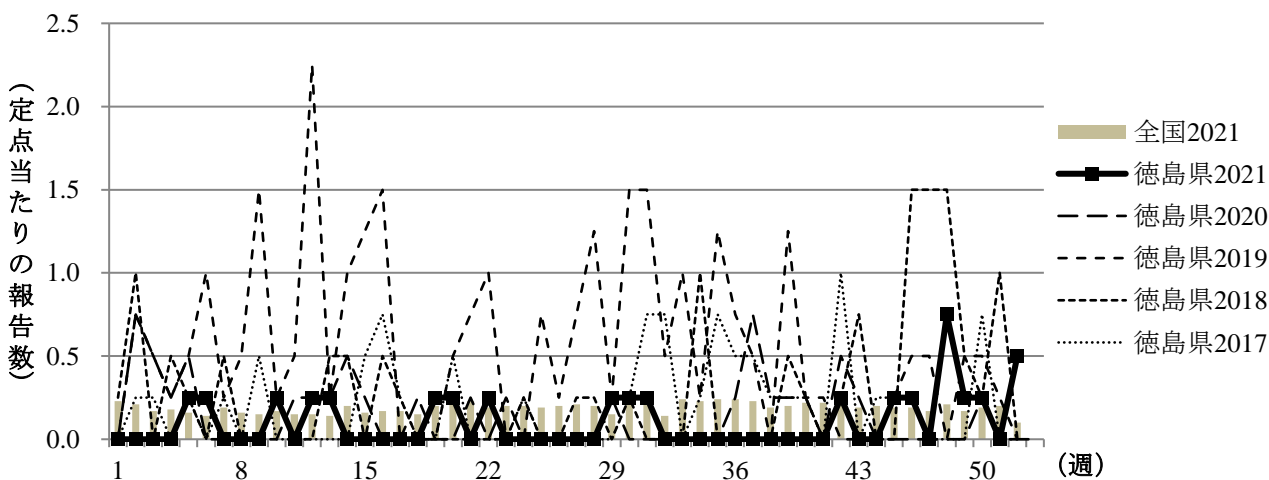


⑬ 流行性角結膜炎

年間報告数は21件と前年(29件)より減少し、過去5年間では最も少なかった。県内では2019年に年間117件報告されたが、その後は低値で推移している。

年齢層別報告数は、10歳代4.8%、20歳代23.8%、30歳代14.3%、40歳代19.0%、50歳代28.6%、60歳以上9.5%と、主に20~50歳代の年代層が多かった。

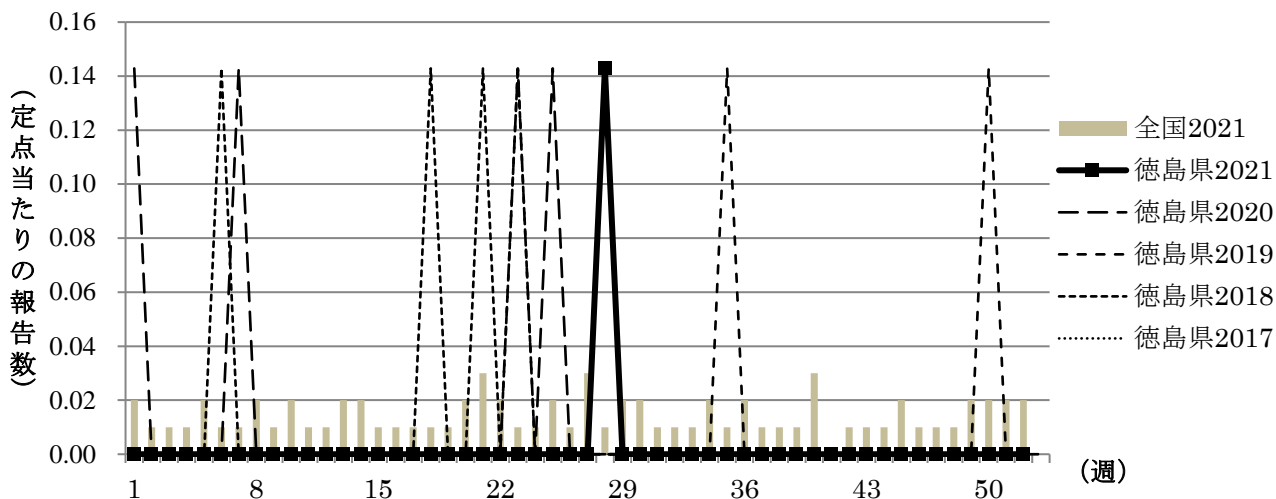
【流行性角結膜炎の週別患者報告状況】



⑭ 細菌性髄膜炎（髄膜炎菌、肺炎球菌、インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く）

年間報告数は1件で、年齢は50歳代であった。前年は3件で、過去5年間では、毎年0～4件で推移している。

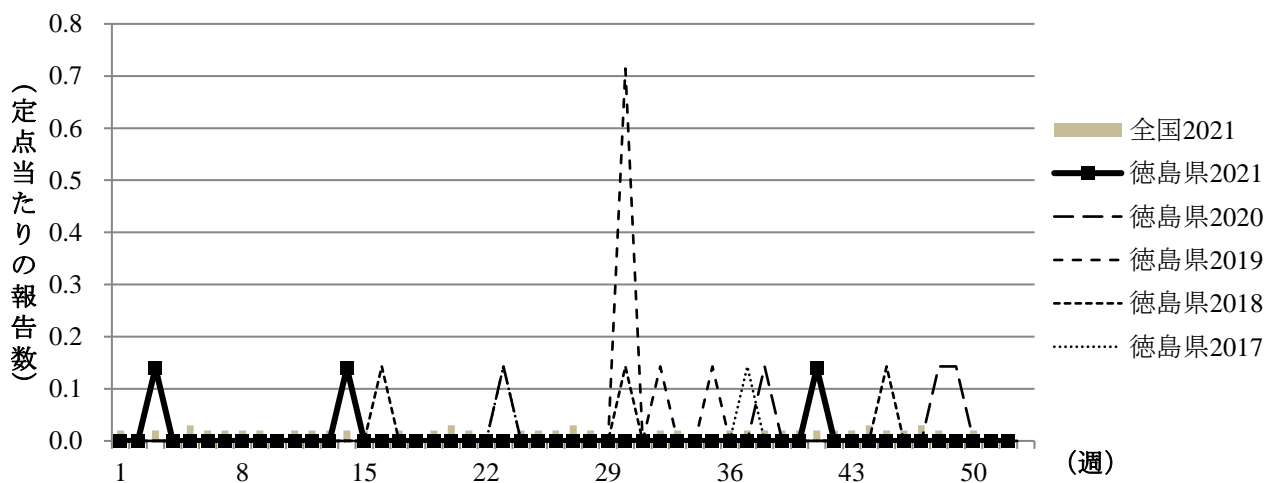
【細菌性髄膜炎の週別患者報告状況】



⑮ 無菌性髄膜炎

年間報告数は3件であった。前年は4件で、過去5年間では、毎年2～7件で推移している。年齢層別報告数は10歳代1件、20歳代1件、60歳代1件であった。

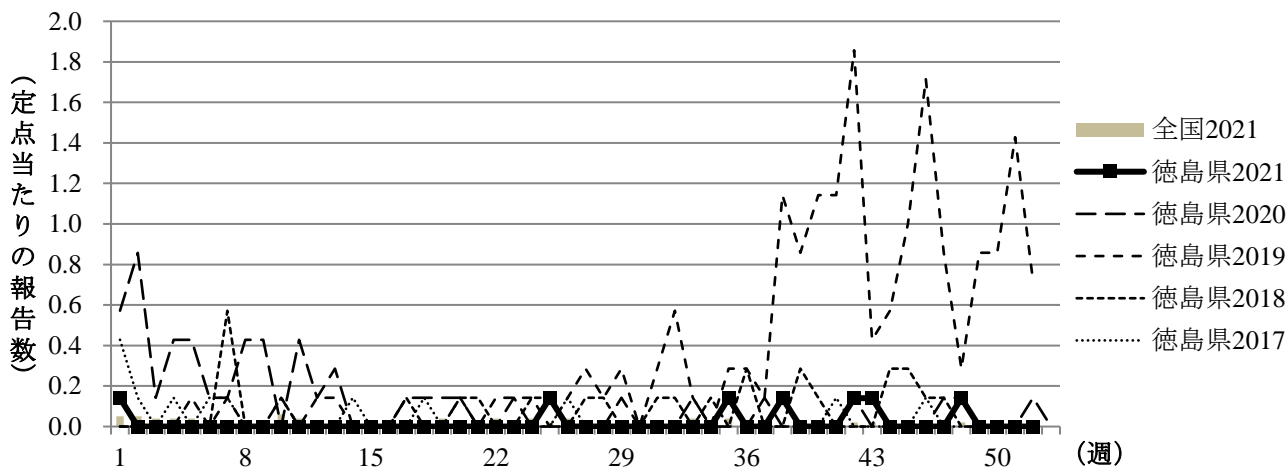
【無菌性髄膜炎の週別患者報告状況】



⑩ マイコプラズマ肺炎

年間報告数は7件と、前年（43件）より減少した。本疾患は、年間を通して発生するが、秋から春にかけてやや多くなるとされる。2019年から2020年に流行が見られたが、2021年は目立ったピークはなく低水準（0.00～0.14件/定点）で推移した。年齢層別報告数は、5歳未満2件、30歳以上5件であった。

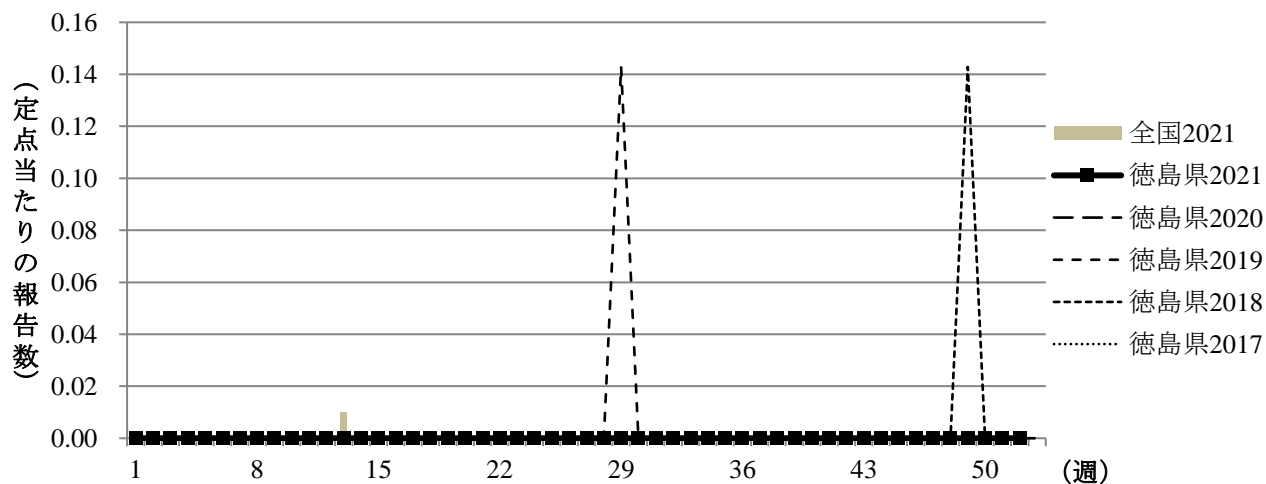
【マイコプラズマ肺炎の週別患者報告状況】



⑪ クラミジア肺炎（オウム病を除く）

2021年は報告がなかった。過去5年間では、毎年0～1件で推移している。

【クラミジア肺炎の週別患者報告状況】



⑱ 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

年間報告数は1件と、前年（1件）と同数であった。年齢は1歳であり、第45週に報告があった。

【感染性胃腸炎（ロタウイルス）の週別患者報告状況】

